



第24回

名工がシューズに込める情熱

三村 仁司

mimura hitoshi

心・技・体。

オリンピックや世界選手権などの大舞台で、アスリートはこのどれが欠けていても、満足なパフォーマンスは望めないだろう。いや、この3つ全てがそろっていても、金メダルを獲得できるとは限らない。

高橋尚子選手と野口みずき選手。この2人のオリンピック女子マラソン金メダリスト誕生の陰には、シューズの職人・三村仁司さんがいた。

足を見れば瞬時に、痛みや歪み、故障につながりやすい弱点などがわかってしまうと言う三村さんの職人歴は早や半世紀近く。アスリートからの信頼度は、コーチやドクターを凌駕しているといってもよいかもしれない。

“現代の名工”にも選ばれた三村仁司さんに、シューズづくりのポイント、メダリストやサッカーの香川選手、野球のイチロー選手などとの裏話、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けてのスポーツ界への提言などを伺った。

聞き手／西田善夫 文／山本尚子 構成・写真／フォート・キシモト

1992年 バルセロナオリンピック 有森裕子選手

## 有森選手の大ピンチ 「かかとが痛くて走れない」 を救う

— 三村さんがおつくりになる靴といえば、真っ先にマラソンシューズが思い浮かびます。1992年バルセロナオリンピックでの女子マラソン銀メダリストの有森裕子さんは、この「スポーツ歴史の検証シリーズ（第15回）」でお招きしたことがあるのですよ。

あのときの頑張りには感動しましたね。途中棄権もやむなしとっていましたから。有森が「かかとが痛くて走れない」と言ってきたのがレースの4日前ですよ。小出義雄監督と来て、「ジョギングシューズで走るしかない」と言うから、「それはあかん」と。ストライドが軽くぼーんと伸びる力のある選手ならともかく、ちょこちょこすり足で走るピッチ走法のおまえじゃリズムに乗りにくいよと。

— 時間が無いのに、大ピンチじゃないですか。

「じゃあマラソンシューズを直してください」と言うから、「医者でも痛み取られへんにしやあないな」と。彼女のソールは走法に合わせて薄めになっているので厚みは変えず、ヒールに衝撃吸収材を入れ、ソール素材をラバーからスポンジにしてクッションを良くして疲れにくくし、2時間くらいかけて修理しました。



— 日本女子選手は他に山下佐知子（4位）、小鴨由水（29位）といてメダルが期待されていましたね。

競技場のビジョンにレースの様子が映ったのが25キロ過ぎてからです。正直、有森はとっくに棄権しとると思ってました。そうしたら何と、エゴロワ（ロシア）とデッドヒートしとったわけです。痛そうにくしゃくしゃの顔して走とる。故障を抱えてあの上り坂のモンジュイックの丘ですよ。あれを見て自然と涙が出ましたね。そんなん初めてですよ、一人で恥ずかしかったけど。

レース後、僕は忙しくておって出られなかったんですが、電話に有森からメッセージが入っていました。「三村さんの靴のお陰で、最後まで走れました！」って。

— そんな秘話があったのですね。

### 高校時代、もっと長もちする靴が欲しかった

— 三村さんご自身が、陸上の長距離を走られていたんですね。

中学時代は野球少年でしたが、陸上もやっていて長距離にはちょっと自信がありました。年に1度、1月に校内マラソン大会があり、僕は毎年2番だったんですよ。1番のやつが野球部だなんて腹立つでしょう。本当は高校は進学校に行きそのあと大学にというルールが敷かれていたのですが、「1番になりたいから陸上の強い高校に行くんや」と、兵庫県姫路市の県立飾磨（しかま）工業高校に進学しました。

— 猛練習の毎日ですか。

それはもう。学校は200メートルトラックで石ころも多くて、靴を2週間に1度履きつぶすほどでした。授業料が1450円ぐらいの時代、当時はいい素材がなくて綿の靴で、880円のところを割り引いてもらって800円。そう買い換えられないので補修しながら使いましたが、もっと長もちする靴があればいいのにと感じていましたね。

— このお仕事を決定づける動機になったんですね、飾磨工業のキャプテンと言えば、大学からの勧誘もあったでしょう。

ありましたけど、「靴をつくるんや」と決めていたので。あの当時、オニツカ株式会社が神戸市の須磨にあり、自宅から通えるので入社しました。1967年です。



1966年頃 飾磨工業高校時代

### 現場を経てオニツカ初の別注シューズ開発担当者に

— オニツカは、1977年に株式会社アシックスになりました。三村さんは、「いい靴をつくりたい」という思いが人生のテーマになっていたのですね。

今も気持ちは一緒です。「この選手のために合った靴をつくろう。頑張っって好記録を出してもらおう」と願いながらつくっています。

入社して、商品開発をする研究室を希望したんですが、最初は現場（第二製造課）に配属されました。多品種少量を生産するラインでした。いま思えばシューズづくりの基礎をたたきこまれ、実体験できた貴重な5年間でした。



シューズ作り

— その後、研究室に？

はい、素材の研究などしたのち、3年目から、社内初の別注シューズ開発担当者になりました。当時、オニツカはCMは打たず、トップ選手に靴を履かせて走る広告塔になってもらうという手法でした。週休2日制が始まり、一般の人がスポーツに親しむ機会が増すとマイシューズの需要も増えるという読みもありました。

トップ選手に靴をつくるにはアスリートの気持ちがわからなあかん。僕は入社後も会社の陸上部でマラソンに取り組み、別府大分毎日マラソンに出場もしていましたから。

— 選手たちから信頼を得て、職人としての自信が芽生えたのはいつごろからですか？

当初は君原健二さん、宇佐美彰朗さん、寺沢徹さんといった雲の上の人たちのシューズを担当し、要求を受け止めるだけで精一杯でした。それが1979年、モスクワオリンピックのプレ大会があって、マラソンは瀬古利彦、宗茂・猛兄弟が出場しました。あのとき、日本代表選手団は50~60人いて、短距離・跳躍も含めほぼ半数、約30人の選手が僕のつくったシューズを履いていました。このころには、コーチや選手にある程度、意見が言えるようになっていました。

### 勝てるシューズづくりのプロセス

#### — 選手の特徴を把握するのはどんなところで？

足を測定します。足の長さ、左右の強さのバランス、足首の柔軟性、アーチ（土踏まず）の形状、膝や内転筋の強弱、骨盤のずれの有無などから、疲れやすい、故障しやすい足なんていうたらすぐわかります。

#### — シューズを製作するプロセスを簡単に教えていただけますか。

靴は、素材とデザインと足型の3つで決まります。まず足型をとって採寸します。それから選手とディスカッションしながら、素材を選んで設計します。裁断し、ミシンで縫製し、成型して、仕上げで検査し完成となります。



大会現場でシューズ調整

#### — 機能は当然かと思いますが、デザイン性もやはり大切なのでしょうか。

その競技に合ったデザインというのがありますからね。例えば横への動きが多い種目だとそのための補強が必要です。材料によっても変わりますが、デザイン面からも横ブレ対策をすることができます。まあ、マラソンなんかは一番シンプルなデザインですよ。

### 足のバランスは トレーニングで補強し あとは靴で矯正できる

#### — 採寸の機械というのは最初からあって？

とんでもない。今は長年のノウハウがありますが、当時は前例がなかったので採寸の技術も経験を積み上げて培っていきました。足型、アライメント（形態）、足裏ととっていくのですが、ポイントとなる数値は手で測定します。弱いところあまりなく、左右のバランスがよくて、体重を乗せて着地から蹴り出しまで5対5で行ける選手というのは強くなりますね。それができている選手はいいフォームをしています。



1979年 福岡国際マラソン、宗兄弟、瀬古選手

#### — 選手の足を触って、これは見込みがあるとわかるものですか。

それはもう。マラソンで言えば瀬古利彦ですね。あれはものすごくバランスがいい。あとは中山竹通ですね。

#### — バランスの良くない選手はフォームを矯正していくのですか。



2004年 アテネオリンピック 野口みずき選手と

いや、フォームより靴で矯正していきます。靴で治せる範囲までは、トレーニングで補強するのです。右の筋力が強ければ左足を強くする必要があります。膝が弱い選手ならば「膝を強うせえ」と伝えます。片足スクワットで200回を何セットといったように具体的に指示します。やる、やらないは選手次第ですが、真面目にやっている選手は成功しますよね。可愛いし、頑張ってると思いますし、つくりががあります。

### — きちんとやっているかどうかはすぐわかりますか？

もちろん。2~3カ月後に測定すれば前回のデータより改善されているか一目瞭然ですから。アドバイスを喜んで受け入れる選手は強くなりますよ。

### — 例えばどんな選手か名前を挙げていただいていいですか。

野口みずき、あれはやりました。最近でいえば、木崎良子（ダイハツ工業）とか、男子だと箱根駅伝で“山の神”と呼ばれた今井正人（トヨタ自動車九州）、あいつは強くなりますよ。

## スタート前の談笑で 野口みずき選手の緊張を 緩める

野口みずきは、2003年の世界陸上パリ大会（2位）が終わったあと、合宿前に藤田信之監督と来たんですよ。足を測定して、「おまえ、ここが弱いから強うせえ。ここは悪いから治しておけ」と細かく方法を教えました。しばらく藤田監督と話をしていたら、体育館から物音がするわけです。のぞくと、野口が言われた通りに練習を始めていました。

### — その翌年のアテネオリンピック金メダルへの布石となったのですね。あの大会は、野口選手のほか、土佐礼子選手（5位）、坂本直子選手（7位）が出場していました。

3人とも僕のシューズでした。靴づくりに入る前、必ずコースの視察に行きますが、あのコース状況は最悪でしたね。酷暑の上に、路面は硬く、暑さ対策でコース上にシャワーが設けられ、滑りやすい。

### — いちばん苦心されたことは？

底をどうするかでしたね。

当日、スタート地点はマラトン村だったんですが、スタートラインの15メートル後ろにおったら、坂本があいさつに来て、土佐が来て、最後に野口みずきが来たんです。野口は普通やったら笑顔なのに、引きつっててね。ああ、ビビってる、これはやばいと思いました。あのときランク的にはダークホースの6位ぐらいだったのに、金メダル候補に挙げられてプレッシャーになっとるわけです。

### — 世界陸上優勝者のヌデレバ(ケニア=2位)やラドクリフ(イギリス=途中棄権)、シモン(ルーマニア=途中棄権)らがいましたね。

そうなんです。「おまえの上に5人おるんやぞ。何でプレッシャーを感じる必要があるんや」って話しました。あのとき彼女は26歳。「こんな過酷なコース、おまえみたいなピチピチしたやつしか無理や」と言ったら、ニコッとしましたね。

あと、何やかんや言ってましたわ。ああ、「この靴、枕元において寝ました」って。だから、「瀬古も有森も枕元に置いたり、神棚において寝たと言ったわ。だからおまえ、今日は走れるぞ」って、スタートギリギリまでそんな話をしていました。

### — 何か走りのアドバイスはしましたか？

彼女は足首の背屈、上に上げることですが、それが若干軟らかかったんです。その分、「下りは気をつけて走れ」と言いました。下りはどうしてもオーバーストライドになるので、背屈が軟らかい人はよりストップを利かせて走るようになります。すると前脛骨筋(ぜんけいこつきん)というところが張ってしまい、平坦になった途端に足が動かなくなるんです。だから「下りは力を抜いて走れ」と注意しました。そうすればストライドも狭めになりますからね。

## 高橋尚子選手は左足が長いせいで股関節に痛み

### — 2000年のシドニーオリンピックで、日本の女子マラソン金メダリスト第1号となった高橋尚子さん

のときはどうでしたか。私が高橋選手に強烈な印象を持ったのは、1998年のバンコクでのアジア競技大会のときでした。

アジア大会のとき、僕は既に靴をつくったんですけど、足型を取って測定していたわけではなく、色とデザインだけ変えたものでした。正確に「おまえの靴はこうや」と取り組みだしたのは、翌1999年の世界陸上セビア大会からでした。

### — 棄権したときですか？



2000年 シドニーオリンピック 高橋尚子選手

そうです。股関節に痛みがあったのでね。あのとき、小出監督と高橋はレースの10日前にアメリカのボルダーからセビア入りしてきたんです。アシックスのブースに来て、「足が痛くてもう1週間ほど走っていません」と言うわけです。それなら足を測定する必要がありますが、セビアにまで機械を持って行っていませんから、できることといたら痛み止めのオイルでマッサージするくらいでした。ギリギリまで調整して、オリンピック前年に無理を

してもと、結局レースを回避しました。高橋は泣いていましたよ。

### — そうでしょうね。

マッサージしながら、僕は「おい、足の長さが違うぞ」と言うんです。そうしたら、彼女は平然と「そうですねですよ。整体の先生に診てもらったとき指摘されました」と言うから、僕は「おまえ、バカか」と怒鳴りました。「それやったらちゃんと測って、靴の厚さを変えていかん限り無理や」と説明しました。彼女の場合、左足が長いので、右足は真っ直ぐ運べるんですが、左足は真っ直ぐ行かず、外へ向いて着地するしかないので突っ張ったような走り方になってしまうんです。

— その負担が股関節にかかる……。

そうです。長い方の左の靴を薄くするか、右を厚くするかどっちかなんですが、難しいのはクッション性が変わってしまうんです。そこからは企業秘密やから言えませんが。

「本番では左右同じ厚さのシューズを履きたい」

高橋には「測定の必要があるからすぐ来い」と言ってあったのに、「ジョギングができるようになったから」と全然来ないんですよ。研究所によく来たのは、翌2000年5月18日月曜日でした。

— よく覚えていますね。



2000年 シドニーオリンピック  
高橋尚子選手

人の名前は忘れてしまうんですが、何月何日にだれの靴をつくったかというのは不思議に記憶に残っているものなんですよ。

測ってみたら、左足は右より8ミリも長い。「これやったらもう靴の厚さを変えてつくらなあかんぞ」と言いました。右を厚くしたら、痛みは一切出なくなりましたね。バランスの悪さ

が原因でできていたまめもできなくなりました。

靴ができたのが6月末。ボルダーに戻った高橋は、7月1日の札幌ハーフマラソン出場のため、また日本へ帰ってきたので、そのときに改良した7足を渡しました。

— もっと早いうちから対策をしておけばよかったのにねえ。

7月19日からオリンピックに向けての合宿が始まるということで、今度は僕がアメリカに飛びました。他にも伊東浩司、弘山晴美、大南博美・敬美姉妹などがいて、最後に高橋のところに行ったんです。「どうや？」と靴の調子を聞くと、「最高ですよ」と。「じゃあ、こっちは頑張らあかん。本番用はベストを尽くすわ」と答えたら、なんと「でも本番用は左右の厚さを変えないで同じにしてください」と言うわけですよ。

— え？

「走りやすいと言ってるそばから、なんで元に戻すんや」としばらく話を続けましたが、左右同じ厚さのほうが前向きになれるといったような、要は気持ちの問題らしいんです。

「あかん、戻したら絶対無理や。去年のセビリアを思い出せ。また痛くなっても知らんぞ」と説得しようとしたけど、全然聞かなかったですね。

辞表をしたため“ある決断”を一人で背負い込む

— 三村さん、どうされたんですか？

仕方ないので、左右同じようにつくと約束しました。どうしようか悩みに悩んで決断したのは、黙って厚さを変えてつくるしかない。

— 当人には告げずに？

はい。当人どころじゃなく会社にも言いませんでした。その代わりに、辞表を書いて机にしのばせておきました。「いい」と信じてつくったシューズで成績が悪かったら辞めるしかないと思いましたから。4足つくって彼女に届けてもらったんですが、その人にも「本人が希望した靴やから」と言っておきました。



三村仁司氏

— バレないものですか？

見破られないように細心の注意はしていましたが、高橋クラスになるとクッションの違いはすぐにわかってしまいますからね。でもその人に様子を聞いたら、「喜んで走っていましたよ」と言うのでほっとしました。

— 結果は日本女子初の快挙、みごとな金メダルでした。2時間19分46秒、世界最高タイムも更新しました。

ゴールのとき、小出監督は競技場に戻るのが遅れていたんですよ。僕はゴールから100メートルぐらいの第1コーナーのところにおりました。ウイニングランをしていた彼女は僕を見付けて、「靴がよかった」ということなのか、指で丸をつくって頭を下げてきました。そのとき僕は3メートルほど離れていましたが、日本の国旗を彼女に投げたんです。

— ああ、ウイニングランのときに背負っていた日の丸は三村さんが投げたものだったんですね。そのあと会話は？

2日後のパーティーのときにしました。「靴、最高でした」と言うから、「やっぱりなあ。左右の厚さを変えたのが正解やったな」とネタばらしです。そうしたら本人、「えっ、そうなんですか!」と驚いたものの、ケロツとして「まめ一つできませんでしたー」って喜んでいましたけどね。こっちは「おまえ、そんだけか」という感じでしたよ。

— ははは、ちょっと拍子抜けですね。

だから、有森裕子や野口みずきのときは感動がありましたけど、高橋尚子のときは感動もしましたが、それより何よりホッとしましたね。

## 十分な練習をこなしてきた という自信を持って スタートラインに立つ

— トップ選手たちの足を含めて体を見ていらして、決断を下し、時には説得し、時にはだますこともするわけですね。

靴つくるのは僕やから。説得もせなあかんし、言うて聞かなんだ選手もいますよ。例えばトヨタ自動車九州で監督をしている森下広一。彼は旭化成時代に、バルセロナオリンピック(1992年)男子マラソンで銀メダルを取りました。彼なんかは、小さい靴を履きたがるんですよ。

— 何かメリットがあるんですか。



1992年 バルセロナオリンピック 森下広一選手

短距離の選手は小さめの靴を好むんですけどね。でもマラソンだから、後半になったら足がむくれて大きくなる。そうしたら体重が前に行きづらくなり、腰が引けて体が立ってくる。最悪の場合、アキレス腱が痛くなるからもうちょっと余裕のある靴を履かなあかと忠告しとったんです。結局、彼はその後、アキレス腱を痛めて引退しましたけどね。

— あの男子マラソンのときは、私も現場にいました。男子は中山竹通選手が注目されていましたよね。結果は中山選手が4位で、谷口浩美選手が8位でした。

中山は、あのとき一番力がありましたからね。

— どうですか、期待をプラスアルファの力として受け止める選手と、プレッシャーになって力を発揮できない選手と、どこに差が生まれると思われますか。

性格も多少はあるでしょうが、やっぱり自信やと思います。練習量も健康管理も含めてね。スタートラインに立ったときに、「こいつらに勝つだけの練習をしてきた。だから負けるはずがない」というのと、練習不足で「後半まで持つかな」と不安があるのでは全然違うじゃないですか。

— 自己管理を含めて自信を持ってスタート地点に立てることが、一流選手の資質でもあるわけですね。

はい、僕は足を見れば「こいつは今回はダメだな」というのはすぐわかりますよ。

## サッカー香川選手には インナーソールを提供

— ここまでは陸上を中心にお話を伺ってきましたが、ほかの競技のシューズもいろいろつくっていらっしゃるんですね。

サッカーだと香川真司（マンチェスター・ユナイテッド）、清武弘嗣（1.FCニュルンベルク）。野球やったら、メジャーリーグでプレーしている選手が何人か来ますわ。北海道日本ハム・ファイターズにいた田中賢介（テキサス・レンジャーズ傘下）やソフトバンク・ホークスにいた和田毅（シカゴ・カブス傘下）とか。和田はこの間会いました。

— 行った早々、左肩を手術しましたが、元気でしたか。

はい、1年間棒に振ったかたちだけど、次はもう大丈夫と言っていました。

— サッカー選手はスパイクのついたサッカーシューズではなく、トレーニングシューズをつくられるのですか。



香川真司選手（マンチェスター・ユナイテッド）

トレーニングシューズと、サッカーシューズ用のインナーソール、いわゆる靴の中敷きですね。香川の場合、26.5センチの靴だとちょっと大きめなので、インナーソールを入れてちょうどピタッとなるようにしています。

— インナーソールでパフォーマンスは相当変わるものですか。

全然、違います。前回2010年の南アフリカでのサッカーW杯大会で、北朝鮮代表の安英学（アン・ヨンハ）選手のインナーソールもつくったんですよ。グループリーグで敗退したあと、成田から電話がかかってきました。大会の出場選手は全部で約700人いるそうですが、「その中で一番走りました」と報告してきましたよ。

各選手の1試合あたりの走行距離がデータ化されているそうで、平均10～11キロのところを自分は15キロ近く走ったって。それはつまり、疲れにくかったということなんですよ。

— すごい威力ですね。

## イチロー選手が求めたのは ひたすら“軽さ”

— イチロー選手も三村さんの靴を使っていたということですね。いつごろからですか。

あいつが出てきたのはオリックス・バファローズの3年目ぐらいですわ。そのころ僕のところへ来て、靴をつくってほしいということ。2001年からメジャーリーグ（シアトル・マリナーズ）に行っ、2004年、262安打のシーズン最多安打記録をつくりました。そのうち、内野安打が58本ですよ。日本のプロ野球だと内野安打の多い選手でも20ぐらいじゃないですか。

— すごい数だなあ。イチロー選手からはどんな注文をされましたか。

ひたすら「軽い靴をお願いします」です。走りやすい、ジョギングシューズに近い靴をつくってくださいと。スパイクは通常、片足で450グラム程度です。それが僕がつくった彼のスパイクは、当時280グラムでした。

### — うわあ、軽い。

それと「いつも新鮮な気持ちで野球がしたいから」ときれいでもっさらな靴を好みます。だから4試合に1足ぐらい要りました。普通の選手なら1シーズン5〜6足で十分なんですけどね。今は靴磨きを雇っているようですが、メジャーリーグは赤土で泥が落ちにくいから、3試合に1足ペースですね。



イチロー選手と

## 大ケガを負った 巨人・吉村禎章選手の 復帰を支援

### — 1988年7月6日、試合中に、足の靭帯断裂の大ケガをした吉村禎章外野手（当時、読売巨人）のシューズにもかかわられたそうですね。

僕が野球の靴をつくるようになったのは、彼が初めてでした。

### — 吉村選手は、札幌円山球場での試合のレフト守備中に、味方中堅手と激突して、左膝の4本の靭帯のうち3本を切断。選手生命も危ぶまれたのでした。

彼は当時まだ26歳で、野球を続けたいという強い意志があったそうです。そこでスポーツ医学の権威だったフランク・ジョーブ博士の執刀を受け、つらいリハビリテーションにも耐えたんですよ。しかし、合う靴がないということでした。

巨人は他のメーカーとチーム契約していて、1回に2足ずつ、計50足ほどつくったけれども「走れない」と。それを知った巨人のチームドクターをしていた日本大学の白幡先生が「日本におまえの靴をつくれるのは一人しかおらん」と言って、僕の名前を出したらいいです。でもその先生と面識はなかったんですけどね。

### — あ、そうだったんですか。

それで上京して吉村に会ってみると、靭帯が切れているから足はだらんとしたまま。矯正する装具をつけてプレーしたいと言いました。正直に「野球のスパイクなんて1回もつくったことない」って言うんですが、「ぜひお願いします」と強く頼まれたので、「適当にやってみるわ」と引き受けました。

### — 適当ですか。

デザインして、底を取り寄せて、つくってみて渡したら、吉村は一発で「これだったら履けます」って言ったらしいですよ。装具は初めは厚かったんですが、徐々に薄くなっていくので、その都度、靴をつくりかえなあかん。「一度、装具を持って研究所まで来い」と呼びつけました。そのときに、「チーム契約しているメーカーじゃないのにどうするんや」と聞いたんです。すると吉村は、当時の正力亨オーナーに直訴して認めさせたそうです。

### — 吉村選手の復活の打席は、翌1989年9月2日の東京ドームでのヤクルト戦でした。たまたま私はラジオで実況していたんですよ。ケガを負ってから1年ぶりに、斎藤雅樹投手の代打として登場。名前をコールされたとき、ものすごい歓声起きて泣いている人もいました。結果はセカンドゴロでしたが、その走る姿に私も感動しました。あのときに履いていたのが、三村さんの靴だったんですね。

黒に白ラインですよ。

## パラリンピアンシューズも

あれがきっかけで、野球のスパイクをつくり出しました。広島カープの前田智徳選手もそうですわ。アキレス腱を切ってから、僕がスパイクをつくるようになりました。

### — 昨シーズンで引退しましたが、彼もすごい選手でしたね。1995年に右アキレス腱を切ってから、ひと人生ありましたからね。2000年には左アキレス腱にもメスを入れました。

かかるとに衝撃吸収剤を入れたりしてつくりました。2007年9月1日、2000本安打を打ったとき、バットなどにサインをしてくれましたよ。

— **パラリンピアン (パラリンピックの選手) 用の靴もつくられるのですか。**



2012年 ロンドンパラリンピック  
佐藤真海選手

つくっていますよ。視覚障害の高田晃一選手。1992年バルセロナパラリンピック走り幅跳びでは銅メダル、2000年のシドニー大会では400メートルリレーで銀メダルを獲得しています。あとは、今、話題の走り幅跳びの佐藤真海選手。彼女の靴もずっとつくっていました。この前、「三村さん、お元気ですか」なんて電話がかかってきましたよ。

— **すっかり有名になりました。**

最初は、あれだけしゃべれる子ではありませんでしたけどね。あとは2012年のロンドンパラリンピックで、シッティングバレーボールチーム全員、黒に黒ラインでつくりました。他に聴覚障害の高田裕士選手。奥さんの千明選手は視覚障害で、夫婦で障害者スポーツに取り組んでいるんですが、彼のシューズもやっています。

定年退職後、シューズ工房「M.Lab」(ミムラボ) 設立

— **2009年4月にアシックスを定年退職してしばらくして、地元の加古川市にシューズ工房「M.Lab」(ミムラボ) を設立されました。翌2010年には、アディダスジャパン株式会社と専属アドバイザー契約を結んでいます。ご自身のお名前をもじった「ミムラボ」というネーミングは洒落ていますね。**

言いやすくわかりやすい名前としている候補を挙げた中から、息子が「これでええんちゃう？」という感じで決めたんですけどね。「工房」というと小さなイメージですけど、借り物ですが建坪は530坪ほどあって、大きすぎるほどです。

— **そこには何が置かれているのですか。**

靴をつくるための裁断機と、ミシン関係ですね。ミシンは15台ほど。あとは成型作業をする際に、つり込みをしたり、底をつける乾燥機もいるし、そんな言うたらやはり相当の機械が要るんですよ。まだ半分は空き地みたいなもんですがね。



M.Lab

日本のアスリートのためにアディダスジャパンと契約

— **日本のアスリートだけでなく、三村さんは海外のアスリートからも高い評価を受けておられます。**

今は日本のアスリートだけにしかつくっていませんけどね。僕がアディダスと契約したのは、まず日本選手を強くしたいという思いからでした。2010年1月17日だったかにアディダスと契約し、1年半ほどかけて新商品を開発し、2012年の1月30日に記者発表しました。

— **どんな製品ですか。**

特注品をつくるまでのレベルではない一般アスリート用の“アディゼロ匠(たくみ)”という製品です。“練(れん)”と“戦(せん)”という2種類があって、前者は練習用、後者は試合用です。試合用は少し薄型ですが、練習でも使えます。昨年は全シューズの中で、売上1位(“練”)、2位(“戦”)ですわ。2010年時点でアディダスのシューズの使用率はゼロに近かったんですが、今は30%ぐらいになっているはずですよ。

「M.Lab」(ミムラボ)は僕を含めて11人の小さな所帯ですから、世界まで手が回らないという事情もあります。

## 失敗を糧に感性を磨いていけばいい

— 11人でやっていらっしゃるのですか。

「M.Lab」(ミムラボ)は少数精鋭主義。技術のある人間しか入れていません。裁断工程、ミシンでの縫製、成型、ソールの調整、圧着、すべてベテランばかりです。僕がアシックスにおるときに採用して各セクションの中心になったやつが来てもうたんす。[三村さんが引き抜いた]という声も聞こえるけど、僕は「来るな」と言うたんすよ。息子と嫁もアシックスにおりまして、「残りたかったら残れよ」と言ったんですけど、僕には相談なく二人して辞めとるわけですよ。

— そうだったんですか。職人の資質というのは、どこで決まりますか。

僕は勉強が嫌いでね、本は読まないわ、他のメーカーさんの研究もせずに、感性だけで生きてきた男です。ただ街を歩いていて、ちょっと変わったデザインや意匠に出くわすと、そういうものを靴に取り入れたら面白いな、という観察眼はいつも持っています。

— なるほど、ものごとを見るあらゆる視線の基本が“靴”なんですね。後進の職人さんの指導についてはどう考えていらっしゃいますか。

僕は感性を大事にやってきました。僕のやることを見てもらい、教えられることは教えます。数字的なことを言うと、測定する箇所は17カ所ほどあります。その数字をもとに、勘と感性で決めていき、あとは体験するしかないんです。教えられない部分もあるわけですから、経験を重ねながら感性を磨いていってもらわないと困ります。磨く手段として、僕は失敗はええと思うんです。その失敗を糧にして、さらに感性を磨いていけばいい。初めから失敗することなく成功するやつなんて誰もいません。失敗をすることで人間は成長するんです。

— そうやって成長していきながら、アスリートからの信頼も得ていくのですね。

靴を履いてプレーするスポーツの場合、8~9割の部分は「靴が命」、つまりシューズが決定づけるんですからね。

— 三村さんは、2004年に卓越した技能者を表彰する厚生労働省の「現代の名工」に選ばれ、2006年には黄綬褒章を受章されていらっしゃいますね。

まあ、望んで受けたものではないですが、名誉なことだとは思いますが、今まで以上に研鑽していく責任がありますね。



M.Lab スタッフ

## 監督・コーチにもっと情熱を持って勉強してほしい

— ナショナルトレーニングセンターが活用され、スポーツ基本法が改正され、スポーツ環境も徐々に整備されてきていると思いますが、そのあたりはいかがですか。

僕はナショナルトレセンには行ったことがないからわからないですけど、なんぼ環境を良くしたって、大事なのは監督・コーチの選手を引っ張っていく指導力ですよ。もっと勉強してもらわな困ります。僕が見た中で、すごい指導者やと思うのは3人です。

### — たった3人。

瀬古利彦を育てた中村清監督。ワコールや野口みずきの監督だった藤田信之。野球では王貞治さんぐらいです。そのあとに続く人は皆無に等しいと思いますよ。

いまエリートアカデミーというのができているんでしょう？卓球、フェンシング、レスリングなどですか。英才教育は一つの手段ではありますが、インパクトのある指導方法がされているのかどうか。

### — 三村さんの理想の指導者像を少し教えていただけますか。

選手の気持ちになって、選手がついてこられるレベルの高い指導ノウハウを持っている指導者です。なんぼ苦しい練習でも、選手が楽しく上を目指していけるような指導のできる指導者がいっぱい何人おるでしょうね。

### — そういう指導者を増やしていくためには何が必要でしょうか。

指導者自身の前向きな姿勢や性格でしょう。この選手を強くするんだという気持ちと、時間を含めてすべてを犠牲にできるぐらい情熱を傾けることができるか。それができたのが、さっきの3人です。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会という目標があるわけですから、選手の育成より監督・コーチの育成を優先したほうが強化につながると思いますよ。



三村仁司氏

## 科学的な検証があるからこそ生まれる“魔法の靴”

### — 三村さんは、靴でアスリートの役に立つことに加えて、補強の運動などトレーナーの役割も同時に果たされているようなものですね。

医者がわからんようなところもわかりますしね。整形外科の医者(せんせい)は、痛くなったらどこが痛いのか特定して痛みを取ってくれます。でもそれだけではダメやと思いますよ。要は、痛くなる原因がわからなければね。

トレーナーだったら、筋肉を触って「これ、凝とる」というところまではわかるでしょう。でも僕はどこが弱いのか科学的に検証して、こういうフォームで走っているからだよと原因を特定しますから、よく驚かれますね。

### — アスリート強化の施策として、スポーツ医・科学という面からのサポートにも力を入れ始めていますが、それではまだ足りない面があるということでしょうか。

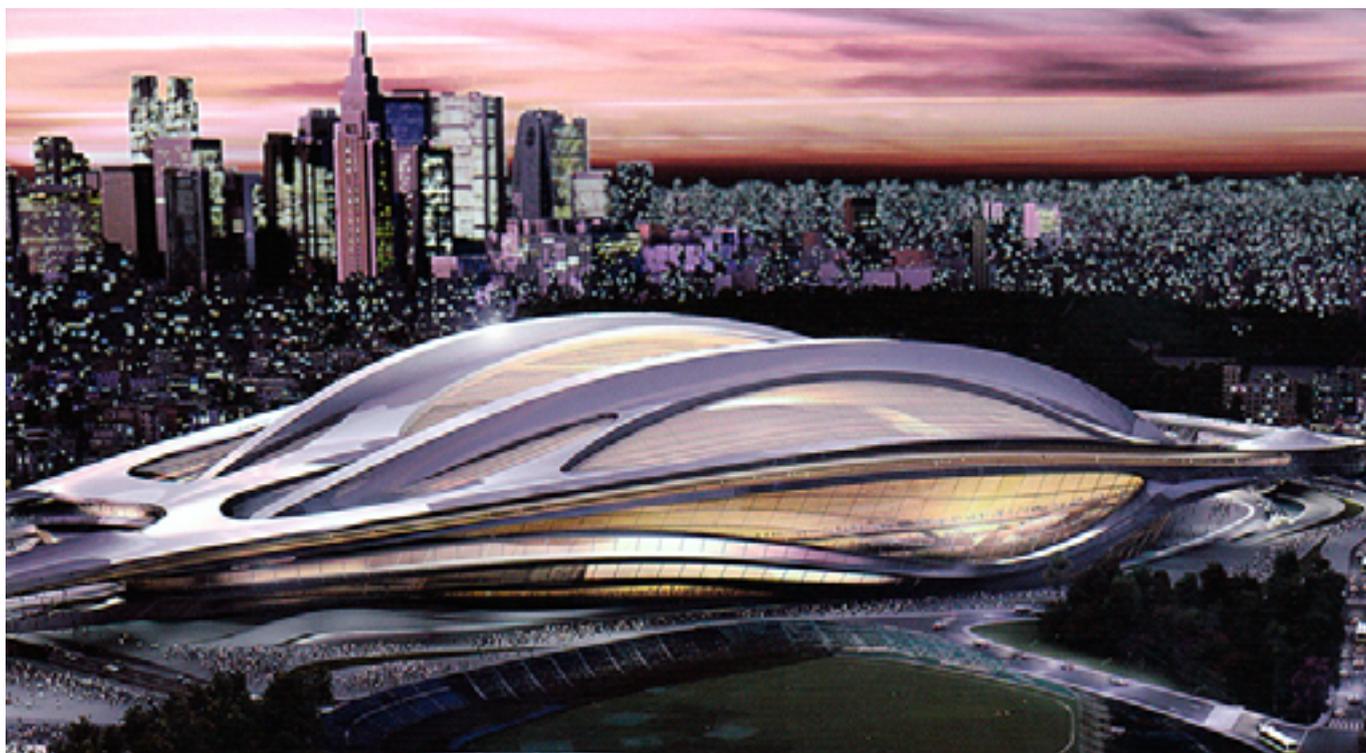
僕がやっているような、ここが弱いからここを強くせなあかん、とはっきり指摘できる人がどれだけいるかですよ。疲れて、故障してからでは遅いんです。そんなんで強うなりますか、ということですね。

僕のところに老夫婦がやってきて、インナーソールをつくってほしいというんです。これまで20人ぐらいの整形で有名な先生につくってもらったんですって。1足3万から7万円ぐらいしたけど、どれも合わない。

### — すごい出費をしているのに……。

そらそうですよ。足も測らんと、見た目だけでインナーソールができますかって。コンピューターで測っても、そのデータをうまく矯正に活かせずに、ノーマルより2ミリほどアーチを上げてみようかとか、科学的な立証もないそんなのでは絶対無理ですわ。

僕はコンピューターで足の裏を測定して、アライメントとって足の形態をとって、「ここが悪いからこうなっています。このようにしたら治ります」と説明して、本来なら2~3時間かかるところを、即席で5分ほどで仕上げました。そうしたら、「これだと全然痛くない。めちゃくちゃ楽だ」と二人で涙を流されてね。あとで正式につくりましたよ。



新国立競技場(予定)

## 2020年東京オリンピックに向け、選手が練習に集中できる環境を

— 若いアスリートからは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでぜひ三村さんのシューズを使いたいというリクエストがあるそうですね。最後に、三村さんご自身の東京大会に懸ける思いを聞かせてください。

日本の選手に活躍してほしいという思いはあります。だからこそ、彼らをつぶしてしまうような組織なり考え方はダメやと思いますよ。うまく言えませんが、空回りしているような感じがして仕方がないんです。純粹だった期待のアスリートが、周囲の影響で自信過剰になって伸びないケースをいっぱい見てきましたもん。

それだけでなく日本選手は外国選手に比べて、身体能力的にも、乳酸がたまりやすく疲れやすいとか筋肉の組成的にもハンディキャップがあるわけです。素質がないと言い換えてもいいでしょう。だから、練習を積むしかないんですよ。

— 練習に集中できるためのサポートが大切ですね。

栄養学的なケアや練習環境の整備は当然大事やと思いますけど、指導者とグッズの面からのサポートですね。グッズの中には、疲れにくい靴、あるいは故障しにくい靴も含まれます。シューズメーカーはそんなふうになってほしいと思います。選手が練習に打ち込める環境をみんなでつくっていく方向にもっていかなきゃ強くなりません。それが現実やと思います。

— いやあ、辛口の中に熱い情熱を感じられるコメントで、きょうはどうもありがとうございました。

## アシックスの歴史

1948  
昭和23

**1948** 三村仁司氏、兵庫県に生まれる

1949  
昭和24

鬼塚商会を改組し、鬼塚株式会社(神戸市)を設立

1950  
昭和25

鬼塚株式会社、「バスケットボールシューズ」  
第1号販売

**1950** 朝鮮戦争が勃発

**1951** 安全保障条約を締結

1952  
昭和27

鬼塚株式会社、「バレーボールシューズ」  
第1号販売

**1955** 日本の高度経済成長の開始

1958  
昭和33

鬼塚株式会社、「テニスシューズ」第1号販売

1962  
昭和37

鬼塚株式会社、「サッカーシューズ」第1号販売

1963  
昭和38

商号をオニツカ株式会社に変更

**1964** 東海道新幹線が開業

**1966** 三村仁司氏、入社

**1969** アポロ11号が人類初の月面有人着陸

**1971** 三村仁司氏、研究室に配属

**1973** オイルショックが始まる

**1974** 三村仁司氏、社内初の別注シューズ  
開発担当者に

**1976** ロッキード事件が表面化

1977  
昭和52

商号を株式会社アシックスに変更

企業スローガンを「スポーツは世界のことば」とする

**1978** 日中平和友好条約を調印

1979  
昭和54

テニス、ゴルフのトータル展開をスタートさせる

1980  
昭和55

明治製菓と販売契約を行い、スポーツサプリメント  
「サバス」を発売

**1982** 東北、上越新幹線が開業

**1984** 香港が中国に返還される

1985  
昭和60

科学的基礎研究体制強化のため、スポーツ工学研  
究所を設置

1990  
平成2

研究開発・人材育成の新たな拠点として、  
アシックススポーツ工学研究所・人財開発  
センター(アシックスR&Dセンター)設立

1992  
平成4

鬼塚喜八郎が会長に就任

バルセロナオリンピックで、大会関係者の全ての靴  
を提供

**1995** 阪神・淡路大震災が発生

1997  
平成9

アシックス誕生20周年

1999  
平成11

鬼塚株式会社創業50周年

「オニツカタイガー」復刻版シューズ発売

2002  
平成14

「オニツカタイガー」ブランドのシューズの  
本格展開を開始

**2004** 三村仁司氏、  
厚生労働省の「現代の名工」に選出

**2006** 三村仁司氏、黄綬褒章を受章

2008  
平成20

新企業スローガン「sound mind, sound body」を  
定める

**2008** リーマンショックが起こる

2009  
平成21

企業博物館であるアシックススポーツミュージアムを  
開館

**2009** 三村仁司氏、定年退職し  
シューズ工房「M.Lab」(ミムラボ)設立

**2010** 三村仁司氏、  
アディダスジャパン専属アドバイザーに

2013  
平成25

アシックスジャパン株式会社を新設  
世界本社機能と日本事業を分離

## 三村 仁司 (みむら・ひとし)

---

1948年兵庫県生まれ。高校卒業後、オニツカ株式会社（現アシックス）に入社。74年に特別注文シューズの製作を始め、以来、陸上競技、野球、サッカー、テニスなどさまざまな競技のシューズを提供、アスリートからの指名も多い。2010年よりアディダス専属アドバイザー。

## 西田 善夫 (にしだ・よしお)

---

1936年生まれ。スポーツ評論家、元NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員。64年の東京大会以来オリンピック10大会で実況、5大会で解説・キャスターを務める。98年から02年まで横浜国際総合競技場初代場長。著書に『オリンピックと放送』（丸善）ほか。

## 山本 尚子 (やまもと・なおこ)

---

東京都生まれ。スポーツライター、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事。スポーツビジネス・シンクタンク勤務を経てフリーとなり、スポーツを中心に執筆活動を行う。『パラリンピックがくれた贈り物』など著書・共著多数。

## フォート・キシモト (写真提供)

---

半世紀にわたり、オリンピック、FIFAワールドカップ、世界陸上などの世界のビッグイベントから市民スポーツに至るまで、幅広くスポーツの写真取材活動を継続して行っている世界的なフォト・エージェント。

企画制作 公益財団法人 笹川スポーツ財団

後援 文部科学省、東京都、公益財団法人 日本体育協会、公益財団法人 日本オリンピック委員会、  
特定非営利活動法人 日本オリンピック協会、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会

メディア協力 (株)共同通信社、サンケイスポーツ

特別協力 (株)アシックス、(株)伊藤園、(株)JTBコーポレートセールス